

沖

俳句雑誌[おき]

5月号

沖 発行所

音の景

能村 研三

六義園三句

緑立つ水分け石は音の景

春興や紀州なぞりの庭配置

峠よりジオラマ山河花仕舞

春の夜の譜めぐりの間も曲流れ

季語の比喩

季語を比喩として使う場合は「季語としては機能しない」という考え方が「季語としての季節感はあるから問題は無い」という考えがある。

私は前者で、句会の指導においてもその主張を通して。

先日句会でこんな質問があった。

桃が咲く村に行けよと辞令かな

これは千葉例会で浅野吉弘さんが作った句で、私も選に選ばせていただいた。ところがその後ある人から、この句の「桃が咲く」は、果たして季語となりうるかという質問が出た。桃が咲く季節ではなくても、村の形容として「桃が咲く村」として使われる場合もあり、辞令も必ずしも四月に限られることなく夏でも出る場合があるだろう。という質問であった。

私は「やや左遷的な異動だったが、それを少しでも和らげるために、今桃の花が綺麗に咲いているあの町へしばらく行ってこいよ」という慰めの気持」を詠んだものであると解釈した。

また、本例会会に出句された。

木の芽吹くやう嘍り出す一歳児

という句があったが、こちらの方は私の「比喩は季語として機能しない」という考え方から採ることは出来なかつた。この句についても先ほどの質問の続きで、この句の場合は、実際に木の

ぞうぞうと音が促す芽吹山

春愁や練習室の壁かがみ

印泥を籠で練り上げ桜の夜

昭和初期の片桐邸

廃邸の沓脱石のさくら冷

鎖樋従ひきれぬ春驟雨

逃水の車間捉へし後続車

芽が吹いているわけではなく、一歳児の様子を例えただけなので季語の本意として通用するかという質問であった。よく解釈をすれば、木の芽の吹く頃に一歳児が喋り出したのだから、木の芽吹くという季語も生きているという考えもあるかも知れない。

私はもう一つ古き思い出を一句にする時は、季語だけは今の時点として詠み、季語も昔の思い出の中から詠まないうようにすべきと言っている。

季語だけは現在形として詠むべきという考え方である。

その考えからすると、季語そのものを比喩として使うことは季語の本意から外れてしまうように思う。

先師登四郎の句に、

鳥雲に入るがごとくに吾子嫁く

という句があるが、これは私の姉が嫁ぐ時の花嫁の父としての心境を詠んだものだが、これも「鳥雲に入る」という季語自体に「ごとく」と続けて、季語を比喩に使っているように思われるが、この季語そのものも「鳥帰る」を比喩的に使われていることから、季語として働きは充分果たしていると言ってよいだろう。

蒼茫集



一番星

岡崎

伸

月面歩行

千田百里

一番星野火美しくなりにけり
すとは沈まぬ夕日春隣
てふてふのひらがな飛びといふべかり
馬手に棒弓手にむすび野焼守
蛇穴を出で肌を刺す風に遭ふ
きのふより濃き土手の青春時雨

東風吹かばボルサリーノの副総理
朧夜の微酔月面歩行かな
啓蟄や当てなく開く時刻表
菜の花化して蝶にお咎めなき関所
春愁や詩もパン生地も寝かせ置き
万愚節山彦の時差確かめて

帯解く音

荒井千佐代

三月

林昭太郎

藻の匂ひ強き涅槃の夜なりけり
流されし難海峡を渡り了ふ
自画像の眼鋭し春の闇
きさらぎや記憶にははの帯解く音
ちちははも黄泉に菜の花食べをらむ
はや帰雁吾に授かりし枷ありて

三月や吸ふときも鳴るハーモニカ
巖を落ち巖を叩いて水温む
淡雪や腹子の透ける蒸し蝶
春光と画板をのせて膝小僧
校庭にオルガン出され風光る
花冷やぷすと抜ける烏賊の腸

百歩まり 北川英子

ややありて濡れティッシュ出る鶯餅
家が沈むと春豪雪の便り
地平線までもと踏青百歩まり
花前線迎へに瀬戸内航路かな
辛夷咲きコンクラーベの白けむり
陽炎にとり囲まれし物忘れ

三寒一温 大畑善昭

火の玉の巨大隕石余寒なほ
三寒一温三寒一温ずつとこれ
肩甲骨助骨雪も消えはじむ
海までの山越え幾つ雪解霽
明日あたり帰る白鳥田に数多
川上へ水の鬣春疾風

水温む 細川洋子

たつぷりと眠りしからだ水温む
浜風の光閉ぢ込めさくら貝

白梅へ浄めの雪となる真昼
眼光につくづく倦みし室の花
水仙は品格の花翳しけり
セロリ噛む皓齒しやきつと進言す

春寒波 菅谷たけし

北屋根の魔除けのやうな氷柱光
雨が雪そして百%雪
春寒波ひかりの奥に光あり
白梅や五六戸隠れ里めいて
花ミモザ抱へて顔をなくし来る
三月や税務課まつりのやうにあり

どこよりを 辻美奈子

古墳より湯気噴く土やあたたか
春の雨春の空気を濡らしけり
二枚目とこのごろ聞かず瓜の種
春の夜のだいたい合うてゐる時計
船底に魚のこゑ聞く春の旅
どこまでが蛇どこよりを水脈といふ

星濡れて 田所節子

風にまだ芯ある畑耕せり
天帝のぐいぐいと引く凧の糸
さへづりを陽のささやきと聴く木椅子
風光る水晶体を取り替へて
星のみな濡れて出揃ふ春北風
つちふるや病みあるやうな街の色

底雪崩 杉本光祥

隕石は宙の言伝て冴返る
春一番銀のスプーンの鈍曇り
東京は獅子舞の形風光る
シルクロード踏破は夢に黄沙荒る
武蔵野の古地図に鷹場陽炎へり
轟音の遅れて届く底雪崩

すみれ咲く 大川ゆかり

声にして数へてみたり葱坊主
薫風や鳥になるなら五位鷲に
片言の子ども初蝶日和かな
つちふるや人工島に小さき森

隕石は燃えつきぬ星すみれ咲く
龍の玉しづかに緩む琴の弦
野遊びぼてり 甲州千草

天袋地袋開くる 四温晴
コンビニや春のマスクの追加中
わらんべの野遊びぼてり重かりし
戸袋を使ひたがりぬつばくらめ
本並べ替へても止まぬ木の芽雨
胸の猫するりと降りる夕桜

豆の花 頓所友枝

勘定文字書き□とあり梅の家
春疾風詩意のアンテナ建て直す
坂下に地番のとんで豆の花
二人なら平屋の暮し小米花
過去形にできぬ三月十一日
両腕に顎のせてより春愁

ここかしこ 岡部玄治

蔵中はまつくらがりの雛まつり
身のうちにすき間いくらか春の風邪
放たれてすぐに寄り合ふ鮭の稚魚

みひらいて花かたくりは蕊のばす
日おもてへあらあら春の滝しぶき
古りて住みよし囀のここかしこ

二番手 千田 敬

禿頭は風の感知器春うらら
鉄塔も山登るらし木の芽山
男湯の朝は女湯百千鳥
しやぼん玉弾ける瞬の銀化かな
春月を雲に託して酒肆に入る
銀いろはいつも二番手亀鳴けり

踏まれ邪鬼 宮内とし子

梅匂ふ面上げたげな踏まれ邪鬼
啓蟄や手足ゆつくり太極拳
雪形や安曇野の天翔けるかに
じやんけんの「ぐー」で始まる花辛夷
風船の自由の欲しき空の青
桜東風生垣低く刈られけり

異議なし 吉田政江

斜張橋海光またぎ三月へ
亀鳴くや出席日数足りをれば

はやすぎる異議なしの声鳥雲に
千の眼が見下ろす甲斐の雛飾り
肥料袋の奥から返事種物屋
世界中コンクラベの目が煙突に春の闇

京の春 安居正浩

沢山が仰山になる京の春
湖に影を沈めるしじみ採り
春風や新歌舞伎座の裏通り
しばらくは五感眠らす春の風邪
待ち針が色を咲かせる針供養
春眠にドアのノックは三度鳴る

春の雪 鈴木良戈

背のびして鵜の羽ばたけり春の雪
今朝もまた眼鏡を探す四温かな
星墜ちて地球の春を壊しけり
海苔干場夕べの風の鳴りにけり
海苔筥に夕さざ波のたちにけり
春愁や鍵のことりとかかる音

潮鳴集



片道切符

七田 文子

花あしび苑の細滝重ね落ち
揚雲雀の恋の片道切符かな
ハンドルの遊びのやうな春の宵
万蕾の中の一花の矜持かな
花こぶし宙へ心を放つべく

水の気負ひ

齊 藤

實

病院に待つ間踏絵に似てゐたり
水草生ふ水の気負ひを躲しつつ
蛇穴を出るや褪せたる鈴の紐
灯台の飛び立ちさうに陽炎へる
吊皮の揺れにまかせる日永かな

トップ記事

佐野ときは

啓蟄や楽器ケースの内は赤
白鳥引く束の間町のトップ記事
おぼろ夜や高架を浮いて行く電車
日脚伸ぶくの字に曲がるトレーラー
梅東風や二つに折れるバスのドア

曖 昧

安藤しおん

隕石は星の散骨亀鳴けり
曖昧なばんざい春のセーター脱ぐ
風光る聖扉そびらにブーケトス
閑雲のま白が重石種浸す
ふらここ漕ぐ風の行間鮮しき

沖作品



能村研三 選

若沖の赤の贅沢寒に入る

神奈川

菊川 俊朗

使はねば言葉寂びたり冬董

雪晴の鳶の目にある山河かな

言文は一致せぬもの春炬燵

何の息ならむぼつりと水温む

北斎の波あかあかと冬落暉

竹の目に錠をはつしと寒明くる

カノープス瞬のまたたき春怒濤

紅梅の色褪せてなほ坂日和

桜の芽気功の指は天をさし

芹生ふる谷戸に吹く風やはらかき

春めくや発起うながす鐘一打

太陽に精気をもらふ牡丹の芽

満行の髻の喜色や春日影

どんと打ちどんどの火照り身にまどふ

千葉

石崎 和夫

市川

高久 正

けあらしの海へ無念の手を合はす

湯豆腐や面と向かへば言へぬこと

今だけを考へ滝の凍ててゆく

鶯餅鳴かず飛ばずをめだらるる

人のこ糸山のこ糸して春闌ける

また会へる別れや春の雲ひとひら

春めけるベンチはどれも池を向き

雪解川小諸の闇を深くして

春光や追ひ抜く背の遠ざかり

長考の鶯の一步や寒の明

芽柳や今戸猿若花川戸

鳥帰る言問橋に潮満来

卒業歌子よりも高く唄ひけり

大樽の箍磨かれて木の芽漬

東京

関根 揺華

五十嵐章子

市川市

平城 静代

沖作品 15句選評

*
能村研

雪晴の鳶の目にある山河かな

菊川 俊朗

雪原を飛び交う鳶。ほとんど羽ばたかず尾羽で巧みに舵をとり、上昇気流に乗って輪を描きながら上空へ舞い上がる様や、「ピーヒョロロロロ…」という鳴き声はよく知られており、日本ではもつとも身近な猛禽類である。悠々と飛んでいるようにも思えるのだが、この時期は鳶は餌を求めて雪に覆われている山河を見据えながら飛行する。悠々と舞う鳶と、その下に広がる雪の山河を描いたスケールの大きい風景詠である。

カノープス瞬のまたたき春怒濤 石崎 和夫

カノープスは星の名で、和名は「布良星」。布良は千葉県の南端の地名であり、この地でのみ見られるという意味合いがある。

作者は館山の方であるからこの名には親しみを感じる。またこの星を見た者は長寿になるという伝説も伝わっている。これに加えて、高度の低さから赤みがかって見えることなどもあつ

て中国の伝説では寿老人の星とも言われる。星の瞬のまたたきの感動と春怒濤の取り合わせが面白い。

満行の髻の喜色や春日影

高久 正

千葉県市川市の中山法華経寺の百日荒行は、二月十日に満行を迎える。寒中の行は厳しいもので、まだ夜が明けきらない頃から水を浴び、寝る時間も惜しんで読経をする。高久さんはこの法華経寺にほど近い所にお住まいの方であるから、この荒行はよく取材されている。満行の日は朝早くから修行堂を出て出迎える信徒の前に現れる。髻をしっかりと蓄え、大きな修行をやり遂げた達成感に思わず喜色が浮かんだ。

湯豆腐や面と向かへば言へぬこと

関根 揺華

冬の寒い時期、じんわりと体をあたためてくれるのが湯豆腐。他の鍋物とはちがって淡泊な味が楽しめる。他の鍋物だと賑やかな会話が飛び交うかも知れないが、湯豆腐の場合はどちらかと言うとしんみりした雰囲気か漂う。相手に対して少し意見を申し述べたかったのであるが、やはり面と向かってしまうと言い出しにくい雰囲気であった。

また会へる別れや春の雲ひとひら

五十嵐章子

三月は別れの季節。学校の卒業であったり、職場の退職や異動など人それぞれに別れのドラマがある。「さよなら」と言うよりは、「またね」という言い方の別れ方もある。別れにはどうしても涙がつきまとうもののだが、また会えると信じていることで、その悲しさも幾分やわらぐ。雲のひとひらを静に眺めるしぐさからもその気持の深さが窺える。(以下略)